

第三百八十四回 青葉会

平成三十年四月二十六日(木) 午後五時半〜八時半 文京区民センター

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 豊田ゆたか

〈投句〉

中野一灯 星田啓子 山田けい子 山内天牛
伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山崎亜也
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 小西弘子 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章
福島正明 村田くに子 山本三恵

《互選句》

六点

五能線今はりんごの花の中

忠彦 (紀・五・弘・千・敏・允)

五点

藪医者奴！花の見頃を病棟に

紀久男 (堅・眞・灯・啓・天)

◎ げんげ田に寝転びをれば遠汽笛

一灯 (孤・龍・允・正・三)

◎ 腰痛は魔女のしわざか山笑ふ

盛雄 (紀・孤・ゆ・天・三)

四点

残り鴨水を剥がして発ちにつけり

孤舟 (五・正・啓・三)

(紀：中七の表現が見事)

空豆を苞(と)ごと焼きて宵の酒

五郎太 (堅・灯・正・け)

◎ 江の島の霞む富嶽や鳶高し

堂哉 (忠・孤・彦・千)

◎ 谷川の落ち合ふ瀬音濃山吹

一灯 (孤・五・ゆ・啓)

夕ざくら亡妻恋し人恋し

規雄 (彦・敏・允・け)

道渡る新入生の高き手や

けい子 (堅・猛・千・敏)

老ひとり桜しべ降る狭庭かな

全 (紀・龍・ゆ・允)

全日本シニア落語会(シビックホールに12名出演)

三点

春昼や素人寄席に身を預け

紀久男 (堅・敏・ゆ)

ああしんど気温上下の春暮るる

全 (猛・龍・天)

◎ 長閑なり遊び疲れた子の寝顔

忠彦 (孤・龍・く)

病む友と来年約束花見酒

全 (紀・猛・正)

(紀：「約束」↓「約す」)

若駒を放ち曠野の主役とす

孤舟 (弘・ゆ・け)

ややありてアウトのコールのどけしや

全 (龍・敏・正)

セスナ機の弾みつつ着く島の春

全 (紀・彦・天)

(紀：中七の表現がびつたり) (伊豆大島)

◎ 半島の北と南の遅き春

五郎太 (忠・孤・弘)

蜜吸われ五弁のままの落花かな

千恵 (忠・五・三)

(桜の蜜を目白・鴨・鶯(うさぎ)が吸ふ)

散り初めし桜堤や蕪村の碑

堂哉 (五・灯・け)

◎ 幹裂けし古い木名残の花吹雪

ゆたか (忠・孤・灯)

行く春や母の遺作の湯呑椀

全 (千・龍・允)

◎ 雁風呂の嘶に更くる浦泊り

一灯 (孤・五・允)

遠雷や下山を逸(は)ざる膝笑ふ

全 (紀・く・天)

どの枝を採らうか挿そか花蘇枋(はなすはう)

啓子 (紀・弘・千)

たちまちに開く若布の緑かな

亜也 (猛・千・啓)

客どうし話のはずむ春床屋

天牛 (猛・弘・正)

樹々芽吹く木曾の温もり二八蕎麦

盛雄 (紀・猛・く)

花冷えや馬籠峠のかくし酒

盛雄 (灯・く・け)

(千…どぶろくと思うが、飛騨高山に「隠し酒」ブランド酒あり)

仁左衛門一世一代「立場(たてば)の太平次」

冴返る舌出し嘲笑敵役(かたきやく)

紀久男 (敏・啓)

夏近しチャーチルの声力あり

五郎太 (天・三)

◎ 最肩チーム今年も弱く四月尽(タイガース)

恵洲 (眞・孤)

庭先に飛び交ふ小鳥と春惜しむ

ゆたか (堅・く)

自家製の杏仁豆腐春暑し

天牛 (紀・啓)

春嵐去りてゴルフの誘ひ来る

そらお (紀)

◎ 春風よ青雲の志を伝えてよ

猛 (孤)

ひと知れず咲きたる花の溪にあり

全 (ゆ)

微睡(まどろみ)て乗越す春の津軽かな

忠彦 (紀)

石楠花を壺に投げ入れ別れの日

五郎太 (紀)

行く春や短かく抱きしことのあり

全 (彦)

◎ 湖畔染むピンクの絨毯芝桜

健介 (孤)

(◎…「染む」↓「染め」)

献血の呼び掛け空し暮の春

全 (紀)

ゆつたりと海目指すかな春の川

千恵 (堅)

春の旅旬の魚に舌鳴らす

全 (紀)

母逝きて三たびの花よ矢の如し

全 (紀)

卒業や慣れぬ着物に澄ます子ら

全 (忠)

春惜しむ荒凡夫の死も惜しみつつ

恵洲 (紀)

(荒凡夫は現代の一茶兜太さん) (元句「春惜しむ荒凡夫亡きこの春を」)

鶯の鳴く音哀しも計報きき

ゆたか (啓)

遥かなる浪人の日よ花は葉に

一灯 (彦)

亀鳴くや人間寿命百までも

昇 (天)

濠端のインスタ映えや花の雲

全 (忠)

雨足(あまあし)の飛沫(しぶき)に変はる春嵐

啓子 (紀)

雀の子羽根震はせて餌ねだる

規雄 (弘)

鶯の初音や暫し人語歇(やむ)

亜也 (灯)

春はやて柿茸落の弁慶や

けい子 (紀)

(御園座改築。新開場は幸四郎襲名)

万愚節天麩羅「いもや」店仕舞ふ

天牛 (三)

(紀…廃業だから↓「店畳む」の方がいいと思う)

車椅子ゆずりて会釈花の下

全 (く)

● 次回青葉会

五月二十四日(木) 井の頭公園吟行 午前十時 象はな子銅像前集合

午後一時半～四時 御殿山コミュニティセンターにて句会

六月二十八日(木) 午後五時半～八時半 文京区民センター

一 今回は、名古屋のけい子さんら9名出席。投句8名。甘辛両方の手土産（千恵さんの純吟「蓬萊」（飛驒高山）、市橋伸彦さんからの「伊丹諸白」（小西酒造）、小生の缶ビールとおかき、啓子さんからの柿の葉鮎とおかき、けい子さんの「なが餅」（四日市の焼餅）、忠彦さんが用意された軽食（海苔巻、唐揚、餃子）に舌鼓打ち乍ら開会。御覧のように忠彦さんが高得点でした。二次会は駅前の焼鳥屋。

二 関係者近詠

介護施設へふた母委ね悴めり

眞希子

妻と見しナイター手に汗握りつつ

規雄

寒の水触れ得ぬ身の内潔めよかし

全

—NHKラジオ「星のいこい」5月16日放送

「恐るな」と聖書より声冴返る

全

今年また桜見上げて涙かな

鈴木章和選

バイト代は進学貯金へ山笑ふ

全

—朝日俳壇4月8日

規雄

寒夕焼きりきり富士を引絞る

弘子

菜の花に水滔々と流れけり

大串章選

幾重にも赤児包まれ雪こんこ

全

日暮れだよ顔とぢよチューリップ

允章

離されて前の二輛は春の海へ

全

早や泣く子卒業式の練習日

全

多摩川の春や外野を守る少年

全

あたたかや真似たきものに猫の伸び

全

絶えず叱咤して呉れし人春北斗

全

—「大鉄会」4月

全

大寒波音又狂うてしまひけり

青史

穂の芽やけものの道に沢の水

盛雄

立春大吉隣家に産声第三子

全

山川をいつくしむかに菜種梅雨

全

厨いまわが棲むところ鬼やらひ

全

馥郁と朝餉の卓の花菜漬

全

土筆和よそうてやれば涙せり

全

花は散る巨艦散る日の鎮魂歌

健介

また転び仁左・玉三郎見れぬ冬

全

汽水湖を埋めんばかり浅蜷舟

全

快癒祈ぐ立春あけぼの筑波富士

全

—「きさらぎ句会」4月

全

司馬遷を語り春旅菜の花忌

全

茎立つやひねもす風の吹きつものり

允章

—「森の座」5月号

男役之宝ジエンヌや菖蒲咲く

全

急流の垂れて山吹ゆれやまづ

全

メダリストの凱旋パレード風薫る

全

緑さす拭きこまれたる寺廊下

全

立夏かなトロッコ電車が谷渡る

全

筋書のなき人生や浮いて来い

全

三 昇さんが代表の初蝶句会（「海」（主宰高橋悦男）傘下39支部句会の一つ）発足25周年記念合同句集を三月末上梓されました。昇さん自選18句の内、小生好みを抄出してみました。

メビウスの帯のごとくに去年今年

全

ひろしまの流燈の夜の闇深し

全

木遣り行く銀座通りや淑気満つ

全

今生の声の透きゆく秋の蟬

全

合戦に出でし家伝の武具飾る

全

分け入りて壺中の天や大花野

全

立泳ぎして風を待つ鯉のぼり

全

子らの夢大きく回す木の実独楽

全

青梅雨や象のはな子の死を悼む

全

子らの夢大きく回す木の実独楽

全

四 プロ俳人46名の「兜太追悼句プラスおくる言葉」が『俳句』5月号に掲載されております。

● 小生勝手に5氏の句を紹介します。

● 炎昼の木の根のごとき兜太の字

友岡子郷

● 料峭の曇天を截れ不戦の碑

矢島渚男

（兜太は奇しくも小林多喜二忌に天寿を迎えた数日後、上田市の無言館に兜太筆「俳句弾圧不忘の碑」が除幕された。彼は反戦作家としても記憶されよう）

● 一死一句と化すや一切冴返る

高橋睦郎

● 山芋里芋会うては黄泉の春めけり

佐怒賀直美

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子

● かの熱き握手忘れじ梅ひらく

西村和子